

症 例

岩手医科大学歯学部口腔病理学教室における病理組織検査の報告
—1998年度の集計—

佐藤 方信, 佐藤 泰生

岩手医科大学歯学部口腔病理学講座

(主任: 佐藤 方信 教授)

(受付: 1999年10月1日)

(受理: 1999年10月12日)

Abstract : Pathological examinations diagnosed in the department of oral pathology of Iwate Medical University in 1998, were statistically reviewed.

A total of 728 biopsy was discovered among 614 cases (Male : 255, Female : 359). And the cases were found most frequently in the seventh decade. Thirty three frozen section diagnoses were revealed.

In histological classifications of the lesions (age), odontogenic lesions consisted of 3 ameloblastomas (16.0 ± 7.0), 5 odontomas (23.0 ± 24.7) and 2 malignant ameloblastomas. The non-odontogenic benign lesions were 25 fibrous hyperplasias (54.9 ± 16.1), 13 irritation fibromas (60.1 ± 9.4), 19 hyperkeratoses (leukoplakia) (61.3 ± 11.9), 7 epithelial dysplasias (68.6 ± 11.0), 13 hemangiomas (48.5 ± 21.6), 5 papillomas (61.0 ± 22.2), 5 pleomorphic adenomas (37.0 ± 16.0).

And non-odontogenic malignant lesion consisted of 49 squamous cell carcinomas (60.6 ± 14.8), 3 malignant melanomas (75.0 ± 2.2), 2 verrucous carcinomas (78.0 ± 2.0), 2 adenoid cystic carcinomas, 2 mucoepidermoid carcinomas, 2 adenocarcinomas and 2 malignant lymphomas. The odontogenic cyst consisted of 41 radicular cysts (40.8 ± 13.1), 13 primordial cysts (38.3 ± 18.2) and 18 dentigerous cysts (30.1 ± 17.2). The non-odontogenic cyst consisted of 39 mucoceles (21.3 ± 18.0), 29 postoperative maxillary cysts (51.0 ± 11.7) and 8 incisive canal cysts (51.9 ± 19.6). In addition, 27 Sjögren syndromes (55.2 ± 16.8), 10 lichen planus (59.1 ± 10.0) and 20 epulides (chronic localized hyperplastic gingivitis) (42.7 ± 16.7) were revealed.

Key words : biopsy, statistical report, oral lesion

緒 言

臨床医学における病理組織検査はきわめて重要な位置を占めている。これまで本学歯学部付属病院の病理組織検査は著者らの教室で担当

し、臨床の一角を担ってきた。今回、本学口腔病理学教室で1998年に取り扱った病理組織検査を集計し、種々の観点から検討したので若干の考察を加えてその結果を報告する。

A statistical report of pathological examinations diagnosed in the department of oral pathology of Iwate Medical University in 1998.

Masanobu SATOH and Hirotaka SATO

(Department of Oral Pathology, School of Dentistry, Iwate Medical University, 19-1 Uchimarui, Morioka, 020-8505 Japan)

岩手県盛岡市内丸19番1号 (〒020-8505)

Dent. J. Iwate Med. Univ. 24 : 233-239, 1999

Table 1. The monthly number of the biopsy -1998-

Medical Source	Month												Total
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
Inside	54	43	57	58	53	64	55	44	48	69	43	57	645
Outside	8	3	9	4	4	3	12	10	8	6	10	6	83
Total	62	46	66	62	57	67	67	54	56	75	53	63	728

症例と検索方法

岩手医科大学歯学部口腔病理学教室で1998年(平成10年)に診断した病理組織検査を本学中央臨床検査部病理部門(主任:中村眞一教授)の病理組織検査症例ファイルの中から収集し, これらを種々の観点から集計した。なお, 症例数(病変数)の集計にあたっては, これらが重複して収集されることのないように細心の注意を払った。

また, 症例の出所(臨床科), 年齢, 性などの臨床的事項は組織検査依頼書の記載によったが, 不詳事項については電話および郵便にて各科(病院)に照会し, 回答を得た。

結 果

1. 病理組織検査件数と症例数

1998年に取り扱った病理組織検査件数は728件(学内645件, 学外83件)であった(Table 1)。学内での出所は口腔外科(I, II)のほかに障害者歯科センターが1件, 小児歯科が1件, 第1保存科が1件であった。学外では雄勝中央病院が33件, 県立久慈病院が12件, 猪苗代歯科が11件, 岩手クリニック水沢病院が4件, 八戸日赤病院が4件, 国保普代病院が4件, 盛岡市立病院が3件で, そのほかに11の歯科診療所から12件の依頼があった。月別の検査件数では10月, 6月, 7月, 3月が多く, 2月, 11月, 8月が少なかった。

総検査件数の中で迅速診断件数は33件(男27例, 女6例)で, 平均年齢は男性が若干高かった(Table 2)。これらを診断別にみると腫瘍細胞の浸潤が見られないと回答したのが20件, 特別の診断を下さなかったのが3件, 腺様嚢胞癌

が2件, 扁平上皮癌が5件, Warthin腫瘍が1件, 粘表皮癌が1件, 腫瘍細胞の浸潤ありと診断したのが1件であった。また, 迅速診断は全てが学内からの依頼(1口外, 2口外)であった。

組織検査した症例数(Table 3)は614例(男255例, 女359例)であり, 圧倒的に女性症例が多かった。年代別には60歳代が最も多かったが, 10歳未満が21例, 80歳代が24例で, 90歳以上の症例はなかった。

2. 組織診断別症例数

腫瘍および腫瘍様病変と診断した症例数(平均年齢±標準偏差)についてみると(Table 4), 歯原性腫瘍ではエナメル上皮腫が3例(16.0±7.0歳), 歯牙腫が5例(23.0±24.7歳)であり, 悪性エナメル上皮腫が2例(44.0±5.0歳)であった。

非歯原性良性病変では線維性過形成が25例(54.9±16.1歳), 過角化症(白板症)が19例(61.3±11.9歳), 上皮性異形成が7例(68.6±11.0歳), 血管腫が13例(48.5±21.6歳)でリンパ管腫が1例(12歳), 乳頭腫が5例(61.0±22.2歳), 刺激性線維腫が13例(60.1±9.4歳), 乳頭状過形成が4例などで, 唾液腺の多形性腺腫が5例(37.0±16.0歳)であった。

非歯原性悪性腫瘍は65例であったが, その大半は扁平上皮癌(49例, 60.6±14.8歳)で, 悪性黒色腫は高齢者の3例(75.0±2.2歳)であった。そのほかに疣贅癌(78.0±2.0歳), 腺様嚢胞癌, 粘表皮癌, 腺癌, 悪性リンパ腫がそれぞれ2例で, その他の悪性腫瘍はそれぞれ1例と少なかった。

嚢胞および嚢胞様病変は162例であった(Table 5)。歯原性嚢胞では歯根嚢胞が41例

Table 2. Number of frozen section diagnosis -1998-

Sex	Male	Female	Total
No. of cases	27	6	33
Mean age	59.3±13.1	56.3±16.8	58.8±13.9

(40.8±13.1歳)で最も多く、原始性嚢胞が13例(38.3±18.2歳)、含歯性嚢胞が18例(30.1±17.2歳)などであった。非歯原性嚢胞は唾液腺の粘液停滞嚢胞(粘液瘤)が39例(21.3±18.0歳)、術後性上顎嚢胞が29例(51.0±11.6歳)、切歯管嚢胞が8例(51.9±19.6歳)などであった。なお、組織学的に確診できなかった嚢胞が1例であった。

炎症性およびその他の病変(Table 6)では慢性炎症性(肉芽)組織と診断したものが54例で最も多く、扁平苔癬が10例(59.1±10.0歳)、エプーリスが20例(42.7±16.7歳)であり、そのほかに歯根肉芽腫が6例、骨髄炎6例、腐骨が6例、唾石症が3例、異物反応が5例、慢性副鼻腔炎が3例、増殖性天疱瘡が4例(75.8±6.4歳)などが若干目立っていた。臨床的にシェーグレン症候群を疑い組織学的にも同症候群が示唆されたものが27例(55.2±16.8歳)であった。そして特別に診断を下さなかった症例が86例であった。

考 察

今日、臨床医学における病理組織検査の重要性は増し、一般に検査件数は年々増加している。本学歯学部付属病院の病理組織検査は口腔病理学教室にて診断しているが、これを年度別にみると、1991年は474件¹⁾であったが、逐年的に増加し²⁻⁴⁾、1995年には722件⁵⁾となっている。その後1996年⁶⁾と1997年⁷⁾は僅かに前年より少なかったが、1998年は728件に増加して過去最高の取扱件数となった。この8年間でみる年度別の取り扱い検査件数には著しい増加傾向がみられている。

病理組織検査を受けた症例数は1991年は349例¹⁾であったが、年々増加して1995年は577例⁵⁾

Table 3. Age distribution of case -1998-

Age group	Male	Female	Total
0-9	8	13	21
10-19	20	31	51
20-29	24	32	56
30-39	24	44	68
40-49	46	55	101
50-59	41	63	104
60-69	50	72	122
70-79	33	34	67
80-89	9	15	24
90-99	0	0	0
Total	255	359	614

に達した。しかし、1996年は536例と若干減少したが⁶⁾、1997年は562例⁷⁾で前年⁶⁾より26例の増加となっている。今回集計した1998年は614例で、この集計を始めた1991年以後で最も多い症例の組織検査を行った年であり、臨床医学における病理組織検査の重要性は一層増してきている。

組織検査を受けた症例の性別症例数についてみると、今回集計した1998年度は女性症例の取り扱い数が圧倒的に多かった。本学における女性症例の多い傾向は1992年以後の症例についてもみられている²⁻⁷⁾。また、1997年度に比較して1998年は男性症例が11例増加したのに対して女性は63例と著しく増加していた。

1998年の組織検査症例の年代では、40歳から60歳代の症例が圧倒的に多く、そのなかでも60歳代の症例が最も多かった。著者らの教室でこれまでに取り扱った病理組織検査では、1991年¹⁾と1992年²⁾は50歳代の症例が最も多かったが、1993年以降³⁻⁷⁾については60歳代の症例が多い傾向がみられている。今回、1998年度の集計にあたっては年齢および性別が検査依頼書に記載されていない症例が学内および学外を含めて14例あり、これらの症例については不明事項を問い合わせ集計にあたった。病理組織検査の診断にあたっては年齢および性別などが重要な疾患もあり、検査依頼書を記載するにあたっ

Table 4. The number of tumor and tumor like lesion -1998-

Lesion	Male	Female	Total
Odontogenic, benign	4	5	9
Ameloblastoma	1	2	3
Odontoma	2	3	5
Mixed tumor*	1	0	1
Odontogenic, malignant	1	1	2
Malignant ameloblastoma	1	1	2
Non-odontogenic, benign	38	75	113
Papilloma	2	3	5
Papillary hyperplasia (inflammatory)	2	2	4
Hyperkeratosis (Leukoplakia)	9	10	19
Epithelial dysplasia	4	3	7
Fibrous hyperplasia	3	22	25
Irritation fibroma	1	12	13
Nodular fasciitis	0	1	1
Cemento-ossifying fibroma	1	1	2
Periapical cemental dysplasia	1	2	3
Blue nevus	1	0	1
Neurinoma	0	1	1
Neurogenic granular cell tumor	1	0	1
Hemangioma	5	8	13
Lymphangioma	1	0	1
Myxoma	0	1	1
Lipoma	1	1	2
Osteoma (Exostosis, Torus)	2	2	4
Langerhans cell histiocytosis	0	1	1
Pleomorphic adenoma	1	4	5
Adenomatous hyperplastic lesion	1	0	1
Myoepithelioma	1	0	1
Warthin tumor	1	0	1
Salivary gland tumor	0	1	1
Non-odontogenic, malignant	44	21	65
Squamous cell carcinoma	34	15	49
Verrucous carcinoma	2	0	2
Carcinoma in situ	0	1	1
Adenoid cystic carcinoma	1	1	2
Mucoepidermoid carcinoma	1	1	2
Salivary duct carcinoma	1	0	1
Adenocarcinoma	2	0	2
Cancer	1	0	1
Malignant melanoma	0	3	3
Malignant lymphoma	2	0	2
Total	86	101	187

* precise type not histologically determinable.

Table 5. The number of cyst and cyst like lesion - 1998 -

Lesion	Male	Female	Total
Odontogenic	38	34	72
Radicular cyst	22	19	41
Primordial cyst (Odontogenic keratocyst)	6	7	13
Dentigerous cyst	10	8	18
Non-odontogenic	36	47	83
Incisive canal cyst	4	4	8
Globulomaxillary cyst	1	1	2
Postoperative maxillary cyst	9	20	29
Mucocele	17	22	39
Epidermoid cyst	2	0	2
Dermoid cyst	2	0	2
Simple bone cyst	1	0	1
Residual cyst	4	2	6
Cyst*	1	0	1
Total	79	83	162

* Precise type not histologically determinable.

ては必要事項の書き落としがないように望まれる。

病変別の症例数についてみると、今回の歯源性腫瘍の集計では歯牙腫が5例（23.0±24.7歳）で最も多く、エナメル上皮腫がこれに次いでいた。エナメル上皮腫の平均年齢は1991年の症例で21.4±12.6歳（8例）¹⁾、1996年度の症例で14.7±2.9歳（3例）⁶⁾と若く、今回集計した1998年の症例も16.0±7.0歳（3例）と若かった。しかし、過去5年（1992年、1993年、1994年、1995年、1997年）^{2-5,7)}の症例ではそれぞれの年度について47.3±32.9歳（4例）、48.0±21.1歳（3例）、43.4±21.7歳（5例）、45.8±16.8歳（5例）、45.6±29.0歳（5例）であり、これらの症例の年度別の平均年齢には年度により若干の変動がみられた。

非歯源性良性病変のなかで乳頭腫の平均年齢は1996年度が39.0±20.6歳（8例）⁷⁾で1991年以後では極端に若かったが、他の年度の症例は50歳から59歳の範囲にあった^{1-5,7)}。1998年の乳頭腫の平均年齢は61.0±22.2歳であり、ほぼこの年齢の範囲にあった。過角化症（白板症）の

平均年齢を過去の7年間でみると¹⁻⁷⁾、56歳から62歳の間にあったが、1998年の平均年齢は61.3±11.9歳（19例）であり、これまでに集計されている年齢の範囲内にあった。扁平苔癬は1991年に1例（71歳）のみであったが、1992年以降では1993年度が6例で最も少なく、1996年度が22例と最も多く、各年度にみる平均年齢は53歳から65歳の間にあった²⁻⁷⁾。1998年の扁平苔癬症例は59.1±10.0歳（10例）で、これまでの症例の平均年齢の範囲に入るものであった。

非歯源性悪性腫瘍についての過去7年間¹⁻⁷⁾の集計では、毎年扁平上皮癌が最も多くを占めていた。今回の集計でも扁平上皮癌（49例）が悪性腫瘍の75.4%と、そのほとんどを占め、これまでの集計結果との間に大きな相違はみられなかった。口腔の扁平上皮癌の年度別症例数は、1991年が27例¹⁾、以後逐年的に症例数は増加し、1995年には53症例となった⁵⁾。しかしながら、1996年は48例⁶⁾、1997年は42例⁷⁾と症例数は減少していた。しかし、今回集計した1998年は49例と若干増加に転じたことは臨床病理学的にも興味深い。

Table 6. The number of inflammatory and the other lesion -1998-

Lesion	Male	Female	Total
Dental granuloma	4	2	6
Chronic periapical periodontitis	2	1	3
Chronic and localized hyperplastic gingivitis (Epulis)	3	17	20
Chronic inflammatory (granulation) tissue	25	29	54
Chronic (inflammatory) ulcer	1	3	4
Scar	0	3	3
Pyogenic granuloma	2	1	3
Foreign body reaction	4	1	5
Purulent inflammation	2	1	3
Lichen planus	1	9	10
Lichenoid reaction	0	1	1
Pemphigus vegetans	3	1	4
Pemphigoid	1	1	2
Median rhomboid glossitis	2	0	2
Fungus infection	1	2	3
Actinomycosis	0	1	1
Chronic maxillary sinusitis	2	1	3
Chronic sialoadenitis	0	2	2
Sialolithiasis	1	2	3
Sjögren's syndrome	8	19	27
Osteomyelitis	3	3	6
Sequester	1	5	6
Hypercementosis	1	1	2
Supernumerary tooth	0	1	1
No evidence of malignancy	0	2	2
No tumor cell invasion	2	1	3
No diagnosis	21	65	86
Total	90	175	265

扁平上皮癌と組織診断された症例の年齢をこれまでの集計と比較してみると、1995年が最も高齢(68.2歳)⁵⁾であったが、その後、1996年の症例は64.2歳⁶⁾、1997年の症例は62.6歳⁷⁾で、今回の集計した1998年は60.6歳となり、このところ年毎に低年齢化の傾向がうかがえた。

歯源性嚢胞を組織型別にみると、これまでは歯根嚢胞が最も多かったが¹⁻⁷⁾、1998年度の症例についてもこの傾向に変わりはない。1998年に歯根嚢胞の次ぎに多かったのは含歯性嚢胞で、ついで原始性嚢胞であったが、これらの症例数は年度によって変動が見られている¹⁻⁷⁾。因みに過去5年間のこれらの症例を集

計してみると、歯根嚢胞が206例で最も多く、原始性嚢胞79例、含歯性嚢胞61例であった。

1998年の集計では粘液停滞嚢胞(粘液瘤)と術後性上顎嚢胞で非歯源性嚢胞の大半(81.9%)を占めていた。非歯源性嚢胞の中ではこれら2種の嚢胞が圧倒的に多いことはこれまでの集計でも見られている¹⁻⁷⁾。粘液停滞嚢胞(粘液瘤)と術後性上顎嚢胞の症例数を過去5年間の集計³⁻⁷⁾でも、前者が156例で後者が139例であり、粘液停滞嚢胞(粘液瘤)の症例が若干多い傾向にあった。

今回集計した1998年度の症例については歯根嚢胞の症例の年齢が原始性嚢胞のそれよりも若

干高く、含歯性嚢胞の平均年齢がこれらの中で最も低かった。著者ら¹⁻⁶⁾がこれまでに扱った病理組織検査にみる歯原性嚢胞症例の年齢でも歯根嚢胞が原始性嚢胞や含歯性嚢胞に比較して高く、含歯性嚢胞の年齢は最も低いという傾向にある。しかし、1997年度の症例にみる年齢では、歯根嚢胞が41.9歳、原始性嚢胞が45.0歳であり⁷⁾、原始性嚢胞症例の年齢が若干高くなっていた。

結 語

岩手医科大学歯学部口腔病理学教室で1998年に取り扱った病理組織検査を種々の観点から集計し、若干の考察を加えてその結果を報告した。

1998年に取り扱った病理組織検査の集計にあたり、ご援助をいただいた本学中央臨床検査病理部門（主任：中村眞一教授）臨床検査技師 安保淳一氏と口腔病理学講座技術員補 寺田歙子さんに感謝します。

文 献

- 1) 佐藤方信, 佐藤泰生, 藤井佳人: 本学歯学部口腔病理学教室における病理組織検査の報告-1991年度の集計-, 岩医大歯誌, 18: 136-142, 1993.
- 2) 佐藤方信, 藤井佳人, 佐藤泰生: 本学歯学部口腔病理学教室における病理組織検査の報告-1992年度の集計-, 岩医大歯誌, 18: 210-215, 1993.
- 3) 佐藤方信, 藤井佳人, 菊地博生: 本学歯学部口腔病理学教室における病理組織検査の報告-1993年度の集計-, 岩医大歯誌, 20: 93-97, 1995.
- 4) 佐藤方信, 藤井佳人, 佐藤泰生: 岩手医科大学歯学部口腔病理学教室における病理組織検査の報告-1994年度の集計-, 岩医大歯誌, 20: 312-316, 1995.
- 5) 佐藤方信, 佐藤泰生, 藤井佳人: 岩手医科大学歯学部口腔病理学教室における病理組織検査の報告-1995年度の集計-, 岩医大歯誌, 21: 300-305, 1996.
- 6) 佐藤方信, 佐藤泰生: 岩手医科大学歯学部口腔病理学教室における病理組織検査の報告-1996年度の集計-, 岩医大歯誌, 22: 163-168, 1997.
- 7) 佐藤方信, 佐藤泰生: 岩手医科大学歯学部口腔病理学教室における病理組織検査の報告-1997年度の集計-, 岩医大歯誌, 23: 116-121, 1998.